

れた。しかしそれから約15年経た現在金沢区の3つの組合の転業率は、最高の富岡組合 37.3%を除き、柴組合32.5%、金沢組合49.7%と非常に低く、ここ10年余り転業はいっこうに進展していない。

横浜市内の他の漁業組合は埋立決定に伴ない次々とスムーズに転業したが、金沢区の組合の場合、なぜ2組合で転業がいっこうに進展しないというような、他の地域と異った展開をみせたのであろうか。この理由を考察するためにはまず、特に転業率の低い柴地区の地域性を把握する必要がある。柴地区は地形的に他の地域から隔絶し、狭い地域に漁業者が密集して居住してきた。そのため非常に閉鎖性が強く、漁業に対する執着も他の地域と比較して非常に強い。また彼らの血縁的、地縁的結合は強く、従来の自分達の生活を守るための団結力の源となっている。彼らにとって漁業を離れ他の職業に就くことは他の地域の漁業者以上に困難なことのように思われる。

金沢区の漁業者の転業の進展を阻害した主な要因は、まず彼らの大多数が高齢者であり、また学歴が低いこと、地元雇用力が弱かったがあげられる。またここ13年間に、昭和45年の交渉妥結当時予測されなかった様な時勢の変化もこの問題に大きな影響を与えていると考えられる。昭和48年のオイルショック以降漁業者の転業はきわめて困難になった。そして逆に、それまで悪化の一途をたどっていた東京内湾の水質が改善の方向へむかったことや、200カイリ問題により沿岸漁業の見直しが図られたことなどが、漁業への執着をいっそ

う強めたと考えられる。

次に転業実績を分析し、その地域性を考察すると、やはり先にあげた転業を阻害する諸要因がここにも反映していることがわかる。高齢者が多く、学歴が低いため就職は困難であり、そのために自営業者が多く、就職では作業員の割合が高い。また地元企業への就職率も低い。

金沢区3組合の間での転業率の相違の原因としては、転業率の高い富岡組合は、昭和46年埋立着工と同時に地先漁場を失い、転業の開始時期が早かったこと、また周囲の都市化の影響を受け、漁業への執着が柴組合程強くはなかったということが考えられる。柴組合はその漁業集落の性格上非常に漁業への執着が強く、また生計のほとんどを漁業に依存していたこと、残置漁場がいつまでも残されたことなどが、転業へ踏み切れない原因となった。金沢組合は、ほとんどが副業として『遊漁業』を営んでいたため、これを基盤として比較的簡単に自営業への移行がなされ、未転業者に関しても再び転業の必要性に迫られた場合、この経路での転業が予想される。したがって私は、この3組合を、都市化の影響を受けていた富岡組合、典型的漁業集落である柴組合、そしてその中間的存在である金沢組合と、性格分けを行った。

最後に金沢区の漁業の展望であるが仮りに漁業の継続が許可された場合、金沢区の漁業者は、他地域の漁業者との競争によって生ずる問題やその他様々な問題に取り組む必要があると予想され、前進は多難であると考えられる。

諏訪湖の御神渡りと気候との関係について

濱 うらら

1. 研究の目的及び方法

諏訪湖の御神渡りの記録は、観測時代以前の気候を知る貴重な手掛かりとされているが、諏訪湖の結氷及び御神渡りがどの程度、気候と関係しているのか、また、いかなる気候要因との相関が強いのかを明らかにする。諏訪湖の結氷期日・御神渡

り期日のデータと諏訪の観測時代のデータを分析することをその方法の中心とする。また、御神渡りの長期にわたる変化とその原因について考察する。以上をまとめる意味から、御神渡りデータから歴史時代の気候推定を行う。気候推定にあたり、御神渡りは、諏訪のみの気候に左右されるのか否

かの問題が生じるが、この点について、日本及び中国の各地の気温データと結氷・御神渡り日との相関を求める方法により明らかにしたい。方法は、データ分析を主とするが、文献・聞き取り調査も取り入れた。

2. 要約

諏訪湖は高地に位置し、面積に比して水深の浅い湖である。冬季には結氷し、多く、結氷後、御神渡り現象をみる。御神渡り現象とは、氷が列状に隆起する現象をいう。その名の由来は、湖に生じた氷の道は、諏訪明神が諏訪湖南東の諏訪大社上社から北の下社へとお渡りになったもの、という信仰による。御神渡りは神聖なものとされ、人々は、御神渡り拝観行事を生み出し、毎冬の御神渡りの様子を記録に残した。このようにして、15世紀半ばからの資料が存在する。その為、結氷・御神渡りの有無、出現の早晚により気候を推定する資料とされてきた。

最近18年間の観測データを用い、気候と御神渡りとの相関を求めたところ、両者には高い相関があり、それは平均気温及び、特に最低気温との相関が強いことが判明した。御神渡りの出現した冬は、しない冬と比べると、平均気温が 1.8°C 、最高気温 1.7°C 、最低気温が 2.0°C 低く、また、結氷した冬は、最低気温が -8°C 以下となった日数、御神渡りのみられる冬は、 -10°C 以下の出現日数が多いことがわかった。

御神渡りの経年変化を、明海の数、御神渡り

の出現期日から分析すると、19世紀頃から、結氷がおこりにくくなってきたことがわかる。また、御神渡り出現の遅延傾向が認められる。それは、換言すれば、結氷してから御神渡り出現をみるまでの期間が長くなったことを示す。15世紀には、約3日であったが、18世紀以後は約7日となった。次にその原因の考察を行なった。結氷・御神渡りに大きな影響を与えたと考えられる人為的原因のうち、温泉による影響及び、諏訪湖の水質汚濁の2つを取り上げた。温泉が与える影響は、19世紀から20世紀にかけて強かったと考えられるが、近年、その影響力は弱まった。一方、水質汚濁は、1960年頃から影響を与えているにすぎないが、そこには様々な問題を含んでいる。諏訪湖の水質そのものの変質もさることながら、汚濁対策としての諏訪湖の埋立、浚渫等により、諏訪湖の湖盆形態が変化したことが、結氷・御神渡りの変化の原因となっていると考えられる。

結氷・御神渡りと気候との関係をふまえ、気候の推定を行う場合、結氷日による最低気温の推定が最も信頼度が高い。また、御神渡りデータの適用範囲を、日本、中国の全25地点との相関よりみたところ、諏訪湖の結氷日・御神渡り日は、広範な地域の気候の変動を示す、との結果が得られた。御神渡りと気候の関係の程度、範囲等が明らかとなり、今後、ますます、御神渡りの記録が重要視されるものと思われる。

千葉県市川市におけるナシ栽培の変容

平田 洋子

1. 研究の目的

千葉県市川市は江戸川をはさんで東京に接しており、千葉県内で最も都心部に近い市である。そのため東京のベッドタウンとして人口の増加も著しい。この市川市において江戸時代末から200年余りの現在に至るまで日本ナシの栽培が続けられている。昭和55年に全国第四位40,700トンのナシ生産量を誇る千葉県において市川市のナシ栽培面

積は237haで県内二位である。同時に市川市は県内ナシ栽培の発祥の地として周辺各市町村に影響を与えてきた。この長い歴史をもつ市川市のナシ栽培が東京の都心部に近いという地理的条件から避けられない都市化の進展に伴いどのような影響を受けてきたのか。また今後はどのように変容していくのかを考察することが本論文の目的である。研究の方法としては統計資料の分析による考察及